The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	夢を託し、託される場所 : 北大阪朝鮮初中級学校
Author(s)	山本, 晃輔
Citation	未来共生学. 2017, 4, p. 273-285
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60720
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

夢を託し、託される場所

北大阪朝鮮初中級学校

山本 晃輔
大阪大学未来戦略機構第五部門特任助教

写真 1. 北大阪朝鮮初中級学校の校舎

名称：北大阪朝鮮初中級学校
場所：大阪市東淀川区
設立年：1957 年
児童数：69 人
教員数：16 人
活動内容：在日朝鮮人のための学校として、独自のカリキュラムを朝鮮語によって教えている。近年は、近隣の公立学校や地域住民との交流を模索している。

1. 北大阪朝鮮初中級学校との出会い

これまで、筆者はブラジルにおける日本移民の研究に従事してきた。1900 年代初頭の日本は、欧米列強による植民地化の脅威に晒された存在であった。当時の日本人は主に経済的理由により、世界各地に生活の場を求めた。ブラジルもそのひとつである。世界各地に移住した日本人は移民労働者としての仕事に従事するだけでなく「学校」を建設した。戦前の日本人学校は旧制学校の影響下にあり、尋常小学校の教科書が使用され、御真影が掲げられた。現在も世界各地に日本人学校が所在し、日本人教師が派遣されている。もちろん、カリキュラムは日本のものである。

ブラジルには「日本人は生活よりも教育を大切にする」という言葉がある。「学校」は日本へ帰国する子どもを支えるための場であり、慣れない海外生活の子

どもたちを守る存在であり、当該国に出ていくための準備の場である。こうした学校の機能を考えたとき、マイノリティ集団にとって民族学校が有する、エスニック・コミュニティの柱としての姿が浮かび上がる。少なくとも日本人にとっては柱であり続けた。

エスニック・コミュニティの柱としての学校は日本にも存在する。朝鮮学校はその名の通り、朝鮮半島に出自を有する人々が建設した民族学校である。2014年10月、私は未来共生プログラムに在籍していた大学院生とともに北大阪朝鮮初中級学校（以下、北大阪朝校）の運動会に参加した。阪急京都線・上新庄駅から徒歩15分ほど歩いたところにある学校は、東海道新幹線に面している。学校に近づくと、運動会らしく応援の声が聞こえる。朝鮮語による声援に手拍子をする高齢者の方々がいる。北大阪朝校の玄完植校長によると、学校に隣接する高齢者施設の方々だという。聞くと地域の方々も数多く参加している。

「日本の方々にも参加してもらっているんですよ。こうして足を運んでいただいて、見ていただきたいんです」

学校訪問の節々で見受けたのが、学校に蓄積されている「つながり」である。つながりは信頼を生む。信頼が地域における朝鮮学校を支えている。ところがそれは、私や日本社会にとって条件付きのつながりでもあるようにも思える。以下でも記述するように、朝鮮学校は朝鮮民主主義人民共和国（以下 共和国）とのつながりを有している。授業においても、学校関係者の気持ちにおいても、祖国との絆は歴史に根付いたものである。こうした祖国との関係を私たちは引き受けることができるのか。本章ではつながりと信頼をテーマに、北大阪朝校を紹介したい。

2. 共生の取り組み――コミュニティの柱としての学校

2.1 朝鮮学校の概略

1910年の日本による韓国併合を前後して、さまざまな事情により朝鮮半島から日本へとやってきた人々は、第2次世界大戦後、祖国への帰国を願い全国各地に「国語講習所」を建設する。日本で生活する朝鮮人にとって、大戦の終わりは「祖国の解放」を意味したが、朝鮮半島の歴史は冷戦期の国際政治に巻き込まれながら複雑な歴史を辿る。1947年に布告された外国人登録令では、強制的に日本国籍を離脱させられる。さらに、当時日本を統治していたGHQの方針に従い、1948年に文部省が朝鮮学校禁止令を交付し、日本の学校に通うことを強要した。こうした日本政府への抗議は、阪神教育闘争を引き起こす。いっそうの団結を深めた朝鮮人らは、全国各地に学校（幼稚部・初級学校・中級学校・大学校）を建設し、子どもらの教育に力を注いだ（金 2002）。

日本で生活する朝鮮人らの念頭にあった帰国先とは「朝鮮半島」である。しかし、朝鮮戦争は朝鮮半島を朝鮮民主主義人民共和国（以下、共和国）と大韓民国に二分し、今もなお緊張状態が続いている。こうした情勢は、日本における朝鮮人社会にも分断を生じさせ、自助コミュニティも在日本朝鮮人総聯合会（以下、総連）と在日本大韓民国民団（以下、民団）が両立するようになった。朝鮮総連は共和国との繋がりをもつ自助組織である。朝鮮学校は朝鮮総連との関係を有している。それはなにより、共和国から朝鮮学校に対し、多額の資金援助が行われてきたという歴史的経緯があるからである。さらには、修学旅行などを通じて共和国との人的交流が続いている。

忘れがちではあるが、日本社会も朝鮮半島との関係を様々な形で続けてきた。日本国内においても、朝鮮学校の各種学校認可や卒業生の大学受験資格を認めるなど学校として一定の地位向上が見られるようになった（朴 2011）。

現在の朝鮮学校の法的地位は、各都道府県にある各種学校である。各種学校は、いわゆる教育基本法第1条に基づく学校ではなく、学校教育に類する教育を行う場所として都道府県知事に認可された学校である。各種学校は1条校と違い、国が定めるカリキュラムではなく、独自に設定した教科内容を教えることができる。地理歴史においては日本の歴史だけでなく、朝鮮半島が扱われる。社会、国語、数学、理科、英語、美術、音楽といった科目に加えて、日本語が設定されていることが独特だろうか。

各種学校には各県の裁量により若干の補助金が交付されているが、大阪府は橋下府知事時代に朝鮮学校への補助金をカットした。また、2010年度から行われている「公立高校授業料無償制・高等学校等就学支援金制度（現在の高等学校

等就学支援金）」においても、朝鮮学校はその対象から除外されてきた。2016年、文科省は「朝鮮学校に係る補助金交付に関する留意点について」を大臣名で通知して補助金の再考を促し、現在、これに準じて各地で補助金のカットが推し進められている。

こうした制度的な排除は、2000年代中頃、日本社会と共和国との関係悪化を理由に正当化されている。また、政治的な排除に乗じて各種メディアによる朝鮮学校批判が日常的なものとなり、デモという名のヘイトスピーチが学校の目の前で行われている（中村 2014）。強烈な憎悪と差別が朝鮮学校に向けられていることは、共生社会を標榜するようになった日本社会の流れと逆行するかのような情勢である。

2.2 北大阪朝鮮初中級学校のつながり

北大阪朝校には幼稚部・初級学校・中級学校があり、あわせて69人の子どもたちが通う。教職員は全員で16名。学校の教授言語は朝鮮語である。1957年に開校した東淀川朝鮮初級学校を原点とし、1960年に現在の朝鮮初中級学校となった。1968年に鉄筋コンクリートの校舎が建設されて、1970年に学校法人認可を取得している。北大阪朝校は北摂地域唯一の朝鮮学校として、地域に根づいてきた。

子どもたちは日本の学校に8時前後に登校する。ホームルームがあり授業が始まる。授業は1時限45分の6時限制で、休み時間には校庭で子どもたちが走り回る姿が見受けられる。授業時間後には部活動が18時前まで行われる。

北大阪朝校は大きな学校ではない。校舎から校庭が一望できるため、誰かが学校に入れば一目瞭然である。子どもたちはすれ違うと、必ず挨拶をしてくれる。元気よく響く「アンニョンハセヨ」の声。私が返事に窮すると、すかさず「おはようございます」と日本語に変えて挨拶をしてくれる。物怖じしないだけでない。来校者の様子から取るべきコミュニケーションを選ぶ。子どもたちの元気な姿、礼儀正しさは学校関係者の自慢である。

北大阪朝校前理事長は胸を張る。「ウチの学校の子どもたちはいいでしょう。キラキラしてる」。学校に児童を通わせている保護者も、子どもたちの姿を誇らしげに語る。「子どもたちは良くも悪くも、大人を信頼しています」「純朴っていうんですかね。素直なのかもしれないですね」「学校がみんな好きなんですよ。休みたがらない。私たちの時代では考えられない話です」という。子どもたちは教師や学校を信頼し、保護者もまた、子どもだけでなく教師と学校を信頼する。そうした信頼に支えられた学校なのである。

北大阪朝校は日々の教育を朝鮮語によって行うが、ときおり日本語が交じることもある。ある教師によれば「子どもたちの生活に沿って言葉を使いわける」からである。子どもたちも真剣な眼差しを教員に目を向けている。朝鮮語がわからなくても、どの授業も子どもたちの興味を引くための工夫が凝らされていることがわかる。ICTを活用し、意見交流も積極的に実施する。教育業界の流行語でいえば、アクティブラーニングである。それでは、なぜ授業が面白いのか。学校の前理事長によれば、その秘訣は教職員の努力によるという。

> 「授業に工夫をこらしているんですよ。なぜなら、そうしなければ子どもたちだって興味が沸かないでしょ。それにね、朝鮮だけのカリキュラムじゃないんですよ。子どもたちは日本社会で生活している。日本社会を無視した教育などありえない。だから、日本の先生よりも工夫しているんですよ」

北大阪地域を管轄する朝鮮総連豊能支部長によれば、祖父母や保護者が引き継いできた伝統や文化をそのまま認められる場所としての意義が朝鮮学校にはあるという。

> 「あたりまえに自分の名前が使えて、自分の親の文化に違和感がない。これはあたりまえですよ。でもそれが日本社会ではできない。だからそれを守る場所は必要なんです」「学校へのニーズは変わってます。保護者の要望も変わってきてますね」

学校が朝鮮人コミュニティの中心にあることは、保護者が学校に子どもたちを通わせる理由となっている。

> 「学校はコミュニティの柱です。子どもにとってだけじゃなく、親にとっ

ても大事ですよ。親の多くはこの学校の出身者です。教師だって朝鮮学校出身者。いい学校だったから、子どもも通わせるし、いまでも友人がたくさんいます。学校で身につけたことが、将来必ず役に立ちます。自信をもって日本社会で生活することができるんです」「日本社会で生活するというのが当たり前になっているでしょ。三世、四世となって。それだけに、生きるための関係を重視するんですよ。それは子どもたちだけじゃなくて、親とか教師だって同じ」

このように朝鮮学校とは、教師と保護者、そして子どもたちが取り結ぶ信頼関係の結節点なのである。旧来、民族学校は民族の言葉や誇りを守るための場所であるとされてきた。中島（2011）は朝鮮学校に子どもたちを通わせる保護者の学校選択理由を「朝鮮学校が自分が何者であるかを当然のこととして教えてくれる場所として、安心して過ごせる場所として見なされている点」にあるとし「『祖国の在外公民だから』とか、『国民教育を求めて』というような趣旨の発言はでてこない。日本社会の側で朝鮮学校を非難するときに使用される朝鮮民主主義人民共和国と結びつけるだけの見方は、いかに日本人にとって自らの教育観が国民教育を自明視しているかの証明とさえいえる」と指摘している（中島 2011: 199）。

北大阪朝校に子どもを通わせる保護者によると、子どもたちが朝鮮学校で「まっすぐ育つ」という。

「親や祖父の文化とは違った日本社会で僕らは生きていきますよね。そういう違和はあるにしても、朝鮮学校で過ごすことは、先代から引き継いだものを大事にできると思います。だからまっすぐ育つんです」「学校の卒業生は日本で活躍してますよ。だから保護者も自信を持って学校に通わせることができるんです」

日本での永住を念頭としつつも「朝鮮人として当たり前に育つ（中島 2011: 199）」ために、保護者は朝鮮学校を選択する。朝鮮学校もまた、学校を卒業した子どもたちが生活することとなる日本社会を見据えて、自らを変化させているのである。

3. 共生の諸課題――未来志向の変化

ところが、どれだけ良い教育をしたとしても、コミュニティの柱であったとしても、朝鮮学校は様々な課題に直面しているという。2016年8月に行われた夕涼み会は、北大阪朝校を支える在日本朝鮮青年商工会、通称青商会主催によるもので、就学前の朝鮮ルーツの子どもをもつ保護者を招いて行われた。約30組の家族が参加し、教職員やサポータらと交流している。

「盛況ですね」と青商会関係者に声をかけたが「そうですね」という返事には力がない。「ここに参加してくれている皆が、学校に入学してくれればいいんですけどね」という。

多くの朝鮮学校が抱えている課題のひとつが「生徒数の減少」である。日本で生活する朝鮮人にとって子どもを日本の学校に通わせるのか朝鮮学校に通わせるのか、それとも別の選択肢を模索するかは悩みの種であった。夕涼み会に参加した保護者の一人は、「朝鮮学校は良い教育をしていますよ」と語る一方で、日本の学校に子どもを通わせる予定であるという。

「朝鮮学校のイベントには積極的に通わせたり、参加しようと思っています。ですが、毎日子どもたちを通わせることには不安があるんですよ」
「なぜ不安なのですが？」
「学校は信頼していますよ。ですが最近の日本の状況ではなにがあるかわかりません」
「日本社会のヘイトスピーチですか」
「そうですね。子どもを電車通学させられないですから。通っている同級生も少ないし。それに朝鮮との関係もあまり上手くいってないでしょう。いまはまだ様子を見るしかないんです」

保護者は教育内容の良し悪しだけで子どもの進学先を選ぶことはできない。日本の社会情勢を念頭に、学校を選ばなければ子どもたちにとっても悪影響が

ある。

それは青商会関係者らも理解しており、「もっと活動を広げていかなければならないんです」という。だがそれは朝鮮人同胞に活動を広げるだけでは達成されない。なぜなら「私たちにとって危機感を覚えるのはメディアの報道です。それは日本人にとってだけでなく、日本の朝鮮社会にも大きな影響がありますから」である。

例えば共和国が核実験を行った場合、日本社会ではネガティブに報道される。北大阪朝校に子どもを通わせている保護者もまた、メディア報道の影響を感じている。「私たちだってショックを受けることがある」ほどの強烈なバッシングが聞こえるからである。「本国の話をなんでも信じているわけではないですよ。けど、なにを信じるかの選別はものすごく難しい」ので、朝鮮メディアや韓国メディア、欧米のメディアの情報も収集しているという。そうしなければ保護者自身も日本社会の報道に飲み込まれかねない。

> 「韓国とアメリカが朝鮮半島で大規模演習を行ったことは（共和国と同じようなニュアンスで）報道されないですよね。もちろん私も日本社会で生きていますし、核兵器には反対です。だとしてもアメリカだって保有しています」

こうした一方的なメディアの影響を少しでも変えていくためにも、日本社会との交流が必要であるという語りも聞かれる。北大阪朝校の卒業生の一人が次のように語っている。

> 「これまで（朝鮮）学校は、学校のなかだけですとか、朝鮮社会のなかでまわってきました。今後はそれでいいのかなって思うことはあります」「いい日本の方、という言い方も変ですけど、私たちも三世、四世です。そういう日本社会で生きる朝鮮人を支えてくれる日本の方もおられるし、そういう人にも知ってほしいんです」

日本人支援者の一人は「朝鮮学校というだけで、朝鮮学校に通うというだけで差別されるのか」という憤りを「それを朝鮮の、在日の人たちが解決しようとするのはそもそも違和感があって。それは日本人がやるべき事柄でしょ」と語る。

こうした社会を変えていくために、当面は局所的な共生が模索されている。しかしそれはあくまでも局所的なものである。メディアや政策を通じて構築される構造的な差別が繰り返し強化されており、日本で生きる朝鮮ルーツの人々を規定し続けているのである。

豊能支部長によると、在日朝鮮人社会もまた日本社会との関係を「未来志向で変化」させる努力が必要になっているという。朝鮮学校は日本社会から隔絶された場所ではなく、日本社会との交流が続けられている。地域の日本人が北大阪朝校を支援する「アプロハムケ北大阪（北大阪朝鮮初中級学校を支える会）」は、高校無償化問題や補助金カットといった朝鮮学校の実情を知ってもらうため、地域での署名活動や在日朝鮮人映画の上映会といった活動を行っている。また近隣の中学校との交流は約10年続いてきた。その他にも、東淀川区のPTA連合に北大阪朝校も特別に参加している。

2016年11月、北大阪朝校の秋祭りは学校とアプロハムケ北大阪が主催し、北大阪国際交流アンニョンフェスタと銘打ち地域住民を招く催し物となった。イベントは公開授業にはじまり、子どもたちによる朝鮮舞踊や朝鮮音楽がお披露目された。

イベントが終了し、片付けの時間では、子どもたちが率先して手伝いをしていた。その片付けもいよいよ終盤に差し掛かると、集中力が切れたのか子どもたちが運動場で遊びはじめ、先生らが注意するという一幕があった。その時、子どもたちが見せた拗ねた顔は、私たちがフォーマルに学校訪問するときには見受けられない姿であった。

上述したように、朝鮮学校の子どもたちは私たち日本人に礼儀正しく元気な姿を見せてくれる。「まっすぐ育つ」ことは、朝鮮学校の教育の賜であることは言うまでもない。他方で、学校を訪問する私たちの前で「元気よく」「礼儀正しく」する姿は、「自分たちが日本社会に見られている」ということを理解しているからに他ならない。そして日本と共和国との政治的不和が深まるにつれ、子どもたちを緊張させ、心理的に圧迫していく。

朝鮮学校に向けられる日本社会からの眼差しの多くはネガティブなものであ

る。豊能支部長によれば「今ではヘイトスピーチと呼ばれますが、そういう蔑視は昔からありましたよ。今じゃなくて昔から。そういう問題を放っておいたんです」

写真2. アンニョンフェスタの様子

ヘイトスピーチを差別主義者の責任として捉えるだけでは充分ではなく、そうした差別の温床となってきた日本社会にも課題があるという指摘である。日本人以外を排斥しようとするあり方は、今日的な問題というよりも歴史的な日本社会の課題である。そしてその歴史的な課題は、子どもたちの生活を緊張状態におく日常的な課題となっている。

豊能支部長は日本社会が自らの社会性・歴史性を考えることは、朝鮮人コミュニティにとっても重要な観点であるという。なぜなら、すでに朝鮮人は日本社会の一部を生きているからである。

> 「日本社会の課題は『日本人』だけの問題ではないですよ」「日本社会がもし多文化共生を実現するとしたら、私たち朝鮮人の問題は考えなければならないはずです。ですが、私たちもともに考えますよ」

前学校理事長によれば「手をたずさえていく、そういう市民の方々に学校に来ていただくことが大事だ」という。そして朝鮮人社会と同じく日本社会も変化していくが、「手をたずさえる」経験を地道に続けていくことが重要であるという。

> 「山本さんは、この学校のいいところはなんだと思いますか？」
> 「信頼だと思います。教師と学校、保護者、児童・生徒、それの三者の信頼関係が重要だと思いました」
> 「いいお答えですが足りません。日本社会もそこに入れていただかなくては」

4. 夢を託し、託される場所としての朝鮮学校

アンニョンフェスタでは、七輪が校庭にところせましと並べられた。七輪のうえでは、焼肉とホルモンが並べられる。校庭ということで若干の罪悪感はあるが、青空の焼肉は格別である。多くの在日朝鮮人と日本人が炭火を囲む。私たちの身の回りにはさまざまな朝鮮文化が息づいている。私たちはそれに親しみ、享受している。その一方で、私たちは歴史的な経緯を忘れ、現在の社会的・政治的枠組みによって他者を理解しようとし、本質的な課題を見失ってしまうことがある。

本章の冒頭、ブラジルの日本人学校の話をした。第二次世界大戦時、連合国側だったブラジルは、日本人に対し日本語の使用禁止令を交付し、日本人学校を閉鎖した。それでも日本人らは日本語の勉強を続けてきた。戦争終結後、日本の敗戦を認めるグループと認めないグループが争ったことは「勝ち負け論争」として知られている。内乱状態の日本移民らを仲裁し、ブラジル社会は受け入れてきた。

その後、日本移民らはブラジル社会に進出し、農業、学業、政治、経済等、様々な場面において信頼を勝ち取ってきた。ブラジル社会の豊かさの一側面を、日系人が支えてきたことは、先日のリオ・オリンピックのワンシーンで日本移民が紹介されたことからも伺える。ブラジルのスーパーには日本移民らが持ち込んだ生鮮野菜が並び、料理店には日本の醤油が置いてある。日本語学校で盆踊りが開催されると、地域の日系人だけでなくブラジル人も参加している。ブラジルの青空のもと、日系人とブラジル人が手を取り合って炭坑節を踊る。日本移民は「ブラジル社会の発展に寄与した」というのが現在のブラジルにおける日本移民への評価であり、少なくとも制度上の差別は撤廃されているし、過去の差別政策への謝罪も行われている。

ブラジルにおける日本人移民のように朝鮮人が積極的に位置づけられることはほとんどない。局所的に日本人と朝鮮人の友好関係が「共生」という言葉とともに暖められてはいるものの、差別的な言説は社会に蔓延し、メディアは繰り返し共和国をバッシングし続けている。日本と共和国の政治的関係は破堤し、日本社会の朝鮮人コミュニティを政策的に差別するような状況が座視されてい

る。学校への補助金交付について、共和国との関係を清算するならば交付するという脅迫的な要求を突きつけているのである。

朝鮮学校関係者の語りには、ある種の定型句がある。例えば、北大阪朝校前理事長によれば「共和国に従属した教育などありえないですよ」という。北大阪朝校を未来共生プログラムの学生と共に訪問した際、「朝鮮学校をはじめて知りました」と語る学生を前に、玄校長も「北朝鮮（共和国）との関係はありませんよ」というが、それは朝鮮学校に関わりを持とうとする日本人向けに語られる言葉である。

そしてその言葉は、祖国である共和国を切り離さなければ、日本人が在日朝鮮人を信頼できないという現実に裏打ちされている。さらに、朝鮮学校を支援する日本人も「共和国と朝鮮学校は関係ない」ということがある。運営補助金についても「共和国とは関係ないのだから認めるべきである」という。

在日朝鮮人が共和国との関係を捉え直し、日本で生きる朝鮮人として自らを位置づけようとする側面もあろう。朝鮮学校の教職員は歴史的な経緯を踏まえながらも子どもたちが日本社会で永住することを念頭に教育を行っている。保護者も子どもたちは将来日本で生活すると考えている。実情にあわせて、朝鮮学校では自らカリキュラムや教育内容を変化させている。

それはそもそも、祖国との関係は在日朝鮮人が独自に考えるべきものである。しかし、多くの場面において日本社会側からの要請に応える形で、祖国との関係を背景化させなければならない。朝鮮学校の変化や日本社会との交流を、共生社会の実現に向けた兆しとして位置づけることは可能だろう。だがそれは「日本社会が受け入れる」形である場合において、共生のメンバーとして受け入れるということにすぎないのではないか。

日本社会における社会的包摂とは無条件な包摂というのではなく、諸条件付きとでも言うべきものなのである。朝鮮学校はエスニック・コミュニティの柱であり、保護者や教職員から子どもたちにエスニックな資源が再生産される場としての機能を有している。朝鮮学校は子どもたちに夢を託し、託される場所である。しかし、日本社会もまた朝鮮学校から託し、託されているものがあるのではないか。彼らが伸ばしてくれようとする手にどのように応じるのか。私たちが今まさに直面している共生の諸課題なのである。

謝辞
本稿を書くにあたってご協力いただいた北大阪朝鮮小中級学校の関係者のみなさまに、深く御礼申し上げます。

参照文献

金徳龍
2002 『朝鮮学校の戦後史　1945-1972』社会評論社。

中村一成
2014 『ルポ 京都朝鮮学校襲撃事件――〈ヘイトクライム〉に抗して』岩波書店。

中島智子
2011 「朝鮮学校保護者の学校選択理由――『安心できる居場所』『当たり前』をもとめて」『プール学院大学研究紀要』51: 189-202。

朴三石
2011 『教育を受ける権利と朝鮮学校――高校無償化問題から見えてきたこと』日本評論社。